

# エクリチュール・フェミニンとしての Katherine Mansfield の “Germans at Meat”

榎 原 理 枝 子

## 1. *In a German Pension* のエクリチュール・フェミニン としての可能性

*Bliss and Other Stories* (1920) や *The Garden-Party and Other Stories* (1922) といった後期の短編小説集と比べると、Katherine Mansfield (1888-1923) 批評において小品集 *In a German Pension* (1911) の注目度と評価は概ね低い。後期の諸作品と比べると文学作品としての完成度が低いため、あたかも後期の作品のための習作であるかのような扱いを受けていることすらある。たとえば、後期の作品に見られる Mansfield の文学テクニクの素晴らしさは *In a German Pension* のような初期作品と較べることでよく分かるといった 1928 年の Edward Wagenknecht の論に、この様な *In a German Pension* の評価の低さの典型的な例を見ることができる。だが、1911 年にイギリスで発刊された際の *In a German Pension* の売れ行きは良好で、3 版を重ねるに至ったという。こうした好評の理由には、この小品集に登場するドイツ人たちがカリカチュア的なまでに愚劣、強欲、無神経に描かれていることが第一次世界大戦を控えたイギリスの反独感情に同調したということになったことがある。出版当時の好評とは相容れない Mansfield 批評における *In a German Pension* の軽視は、文学的なテクニクの未熟さ<sup>(1)</sup> だけが引き起こしているのではない。ここには読者が Mansfield の作品に求める叙情性が欠如しており、それを指摘する論者もいる (Dunbar 9)。

しかし近年になって、たとえば1983年のC.A. Hankinによる *Katherine Mansfield and Her Confessional Stories* などのフェミニズム批評の立場から *In a German Pension* は注目されるようになってきた。

なぜフェミニズム批評が *In a German Pension* に注目するのか。 *In a German Pension* に収められた13編の小品全体において、総じて男性は粗野で支配的、時には暴力的にすら描かれている。このことは *In a German Pension* が男性性の神話を突き崩しているテキストであって、これが女性作家によって書かれたということは、男性中心の文学観を女性作家が書き換えようとしているということを意味しているからというだけではない。 *In a German Pension* に収められている“*At Lehmann's*”や“*The Child-Who-Was-Tired*”などに顕著に見られるように、出産は忌まわしいものとして語られる。ところが、19世紀末から20世紀初頭のイギリスにおいて少子化は深刻な社会問題で、ことに大英帝国存続のための母としての女性の役割がクローズアップされていた<sup>(2)</sup>。こうした母性称揚の時代にあって、出産への嫌悪感を語るこれらの小品は、家父長制のイデオロギーにおいて女性を母という役割にのみ回収しようとすることに明らかに反旗を翻しているからだ。

しかしながら、こうした姿勢のみが *In a German Pension* をフェミニスト批評が注目するテキストにしているのだろうか。 *In a German Pension* が含み持っている問題意識は、テキスト表層の反男性権力という姿勢だけに見出されるのではない。男性権力への嫌悪感を皮肉でユーモラスな調子で語っている語りにこそ *In a German Pension* の特性は見られるべきではないだろうか。たとえば、1977年のC.K. Steadの論では、 *In a German Pension* が単に反ドイツと男性嫌悪の書ではないとして、そのユーモアを評価している。そして、 *In a German Pension* 執筆時のMansfieldの次のような事情との連続で、この小品集を解釈しようという身振りを見せている。20歳のMansfieldは1908年、作家になるために故郷ニュージーランドを後にし、ロンドンに向かう。1909年3月には結婚したものの、その日のうちに夫のもとを去る。5月、スキャンダルを恐れたMansfieldの母親がニュージーランドからロンドンに来て、Mansfieldをドイツのバヴァリアに連れて行く。6月、Mansfieldは母親に連れて行かれた高価なホテルを引き払い、ペンション・ミュラー（Pension Müller）に移り、そこでまもなく流産するが、

エクリチュール・フェミニンとしての Katherine Mansfield の “Germans at Meat”

子どもの父親は夫ではないらしい<sup>(3)</sup>。このペンション・ミューラーでの体験が *In a German Pension* のもとになっているということは知られており、語り手の滞在しているペンションもこの同じ名前を持っている。*In a German Pension* は、“Germans at Meat” を含む 7 編が一人称の語り手による小品から、6 編が三人称の視点からのもので構成されている。これら 7 編の一人称の語り手である若い女性は、同じ人物であると考えられる。そしてドイツのペンションで一人療養しているというこの語り手のあり方は、*In a German Pension* 執筆時期の Mansfield 自身の状況を髣髴させるものであることから、語り手に Mansfield 自身が投影されているという論が Mansfield 批評の主流をなしてきた。Mansfield をセンチメンタルな叙情的作家という枠組から解放し、そのラディカルな相貌に注目して Mansfield を論じている Pamela Dunbar の画期的な論考においても、語り手と作者 Mansfield との関係が、つまりその連続/不連続が問題とされる (Dunbar 11-26)。

*In a German Pension* に収められている一人称の語り手による小品は、必ずしも伝統的文学観における「短編小説 (story)」ではない。語り手が彼女を取り巻く人々との会話を描写したり、語り手による周囲の人々の観察を記録したりしたものである。語り手によって書かれた対象よりも、むしろ語り手が「書く」という行為そのものが、このテキストを存在せしめているのである。この意味で、*In a German Pension* は行為としての「書く」ということに自覚的・意識的なテキストであると言える。Roland Barthes は、何かについて「書く」という他動詞的な著述活動ではなく、「書く」という行為自体を重視する自動詞的な活動を指すためにエクリチュール (écriture) という概念を用いている<sup>(4)</sup> が、この意味でのエクリチュールを、この *In a German Pension* に見出すことができる。さらにまた、この観点から、*In a German Pension* に収められた一人称の語り手の視点による小品に見出せる語り手の「語り」=「書く」という行為、すなわちエクリチュールを捉えることによって、このエクリチュールが、エクリチュール・フェミニン (écriture féminine) であるという読みの可能性を見出すことができるのではないか。

ここでエクリチュール・フェミニンについて確認しておきたい。Jacques Lacan, Michel Foucault, Jacques Derrida が展開したポスト構造主義の影

響を受けながら、西洋形而上学の解体を試み、意味の多様化、価値の多元化、主体の複数化を提示した Julia Kristeva, Luce Irigaray, Hélène Cixous らはそれぞれ独自の方法論でエクリチュール・フェミニンという概念を提示した。彼女たちが切り拓いたポストモダン・フェミニズムは、父権社会の体制のもとでの性差による固定的な二元論を解体し、多元性を取り出そうと試みるものである。この思想は、階級、民族、人種、宗教、文化、セクシュアリティといったジェンダー以外の諸々の差異を基軸とし、あらゆる事象を社会的、文化的構成物とみなし、コンテクストのなかでの意味理解を目指す。Kristeva が目指したのは、西洋一神教文化システムとしての言語構造、宗教秩序などを、体制から排除されてきた他者の視線で逆照射し、他者抑圧のプロセスを明らかにしていくことによって、他者の解放を目指し、反エディプスの主体形成をすることであった<sup>(6)</sup>。エディプス的な主体形成の回路を残したままでその形成過程に変容を企てる Kristeva に批判的な Irigaray は、それまでほとんど言説化されることのなかった女性主体を前景化させて、男性中心の体制の打破を試みる<sup>(6)</sup>。また Cixous は、男性中心主義体制の解体を実践する契機として性的差異に注目し、男性の言語や思想の抑圧的な構造を打開する革命的なエクリチュールとして、エクリチュール・フェミニンを位置付けている<sup>(7)</sup>。そして Elaine Showalter は、女性による文学のための批評の枠組みの必要性を訴える<sup>(8)</sup>。これらの論考を念頭に置きつつ、男性中心の世界観・文学観によらない言語、文学の可能性の追求という意味で、本論ではエクリチュール・フェミニンという概念を用いる<sup>(9)</sup>。そしてエクリチュール・フェミニンとして *In a German Pension* の一人称の「語り」を捉えるという読みの可能性を提唱したいというのが、本論の狙いである。そもそも、*In a German Pension* がフェミニズム批評の見地において重視される所以はここにあるのではないか。

だが、こうした批評的視点は看過されてきた。たとえば、W.H. New は、文学におけるキャノン (canon)、植民地主義のイデオロギー、批評的な欲望が Mansfield の読みにいかなる影響を与えてきたのかという観点から Mansfield の著作の読解に取り組んでいる。そして New は、帝国主義の時代であってヨーロッパ世界より下位に見られてきたニュージーランドのイメージや、病弱な女性作家というバイアスから Mansfield の読解を開放しよう

エクリチュール・フェミニンとしての Katherine Mansfield の “Germans at Meat”

と試み、「書く」という行為と読みの実践に注目して Mansfield を論じている。New は Mansfield がセクシュアリティに意識的な作家であることを強調し、弱さや無垢と結びついた家父長制のイデオロギー内での女性性の強調を覆すことを試みており、*In a German Pension* の、特に “The Child-Who-Was-Tired” に見られるような結婚、出産への嫌忌感には注目しているものの (38-39)、*In a German Pension* に収められている一人称の語り手によるスケッチのエクリチュールの問題には踏み込んでいない。また、先に言及した Dunbar は、従来あまり重視されてこなかった *In a German Pension* に注目し、*In a German Pension* における語り手と Mansfield との関係の問題に深く踏み込んでいる。語り手を「不完全に作者から切り離された (Dunbar 12) 存在として捉え、語り手の置かれている状況だけではなく、語り手の態度、辛辣さが、Mansfield 自身のそれと一致するという知人の証言も Dunbar は持ち出し (11)、時には語り手と作者 Mansfield を同一視して論を進めたりもする。これは決してテキストに伝記的事実との照応関係を求めているだけではなく、テキストを、それが生成された状況に置き直して考えようとする Dunbar の姿勢の表れである。語り手の問題を考えるにあたって Dunbar が、1910 年の *New Age* での初出のヴァージョンの “Germans at Meat” を持ち出しているのも、こうした姿勢の表れであって、初出ヴァージョン “Germans at Meat” を、1911 年に *In a German Pension* に収められた “Germans at Meat” のインターテキストとして捉えているということである。ここで Dunbar は、初出の “Germans at Meat” では語り手が Mansfield の本名である Kathleen という名前であったということに注目している。つまり、“Germans at Meat” の語り手は、Mansfield 自身と連続した存在として構想されたということの重要性に Dunbar は着目しているのだ。テキストを解釈するためには、Mansfield の人生を参照する必要があると Dunbar は言っているが (13)、これは「書く」とことと生きることが連続していた作家としての Mansfield のありようを示す例として考えることができ、作家の身に起こった出来事をもインターテキストとして捉えるべきということである。だが、「語る」すなわち「書く」という行為に特化したエクリチュールという観点は示していない。

*In a German Pension* に収められた小品のなかの一人称の語り手による

「語り」を、語り手によるエクリチュール・フェミニンの実践として捉え直すことによって、Mansfieldの文学活動のなかでの *In a German Pension* の位置付けを問い直したいというのが本論の目指すところである。この問題を、“Germans at Meat”を中心に、適宜 *In a German Pension* に収められた他の一人称の語り手による小品も参照して考えていきたい。

## 2. 不可視のニュージーランド、異邦人性、 エクリチュール・フェミニン

語り手は男性のイデオロギーの共有を拒否した主体として「語る」すなわち「書く」。 *In a German Pension* の一人称の語り手による小品“Frau Fischer”の語り手と、5人の娘たちの母親である Frau Fischer とのやり取りは、それを顕著に示している。語り手の身の上話を聞きたがる Frau Fischer に対し、語り手は、結婚はしているが夫は船長で長い航海に出ているという話を作り上げて話す。未亡人の Frau Fischer は、彼女自身の境遇と語り手のそれとを重ね合わせて、夫のいない語り手に同情の念を示す。すると語り手は次のように答える。

“I like empty beds,” I protested sleepily, thumping the pillow.

“That cannot be true because it is not natural. Every wife ought to feel that her place is by her husband’s side — sleeping or waking. It is plain to see that the strongest tie of all does not yet bind you. Wait until a little pair of hands stretches across the water — wait until he comes into harbour and sees you with the child at your breast.” I sat up stiffly.

“But I consider child-bearing the most ignominious of all professions,” I said. (“Frau Fischer” 19)

家父長制社会のイデオロギーに同調し、女性は第一に妻、母であるべきであると考えている Frau Fischer にとって、夫の不在を楽しんでいるかのような語り手のあり方は「不自然」なものなのである。語り手は出産への嫌忌

感を語るが、語り手が表明しているのは Frau Fischer が強調している夫を引き付けておくための方策としての出産に対する嫌悪と侮蔑である。そして語り手が拒否しているのは、Frau Fischer が典型的に示している家父長的イデオロギーを当然循守すべきものであるとして尊重する姿勢であり、そのイデオロギーの存続に嬉々として従うことである。家父長制と、それが思想的基盤として支えていた支配と服従の構図としての帝国主義、それが作り上げていったヨーロッパ中心の世界観、歴史観といった当時の支配的イデオロギーを、無意識に盲目的に支持することを拒否する語り手。こうした異端者としての語り手の声の存在を生かそうとしている *In a German Pension* の一人称による小品をエクリチュール・フェミニンとして捉えることは可能である。さらにすでに述べたように *In a German Pension* は伝統的文学観における「物語」としての小説 (novel) でも短編小説 (story) でもない。つまり、「物語」という文学の形態を自明のものとして無批判に受け入れることへの抵抗の一形態なのである。「物語」の形成ではなく、「書く」という行為に自覚的なのが、エクリチュールとしての小品集という形態である。

初出の “Germans at Meat” では Englishwoman とされていた語り手は、*In a German Pension* に収められたヴァージョンでは、Englishwoman という説明はなくなり、国籍不詳の存在となる。だが、あたかもイギリス人であるかのように扱われる。その顕著な例を *In a German Pension* に収められた小品のひとつで、一人称の語り手による “The Baron” に見出すことができる。この小品において、ペンション・ミューラーに男爵がやってくる。その男爵は一流の男爵の一人 (He is one of the First Barons.) (“The Baron” 5) であって、神経症の治療のために毎年ペンション・ミューラーに滞在するという。他の滞在客が語り手に “Now in England, in your ‘boarding-house,’ one does not find the First Class, as in Germany.” (“The Baron” 5) と言うことに見られるように、語り手はイギリス人であるということが暗黙の了解になっている。また、別の小品 “The Advanced Lady” では、イギリスの思想を研究しているという女性に “I think you are English?” (“The Advanced Lady” 62) と聞かれて語り手はそれを認めている。だが、また別の一人称の語り手による小品 “The Luft Bad” では、Vegetable Lady と呼ばれる菜食主義の女性と語り手との間に、語り手の国籍をめ

ぐって次のようなやり取りが交される。

“Are you an American?” said the Vegetable Lady, turning to me.

“No.”

“Then you are an Englishwoman?”

“Well, hardly —”

“You must be one of the two; you cannot help it. (...)” (“The Luft Bad” 43)

語り手が Mansfield と自身と不可分の存在であることを念頭に置くと、語り手はニュージーランド人であろうという推測を誘う箇所である。ヨーロッパの非英語圏ドイツにあって、英語圏といえばイギリスかアメリカしかないのであり、ニュージーランドが不可視の存在であるということが前景化する。しかも語り手は、先に見たようにイギリス人かという相手の問いかけを是認したこともあり、この場面ではイギリス人であると認めてはないものの、完全に否定もしていない。初出のヴァージョン “Germans at Meat” では、Mansfield の本名である Kathleen という名前が付いていたこの語り手は、*In a German Pension* に収められた “Germans at Meat” では名前がなくなっている。名前がなくなることによって作者と切り離されたかのような語り手の作者とのつながりは、しかしながら、語り手が彼女自身を、イギリス人でもアメリカ人でもないとして規定するという形で存続する。

だが、ドイツ人のイギリスへの敵意は、語り手をイギリスと同一視させる。語り手はドイツのペンションにあってはイギリスに帰属する者として扱われ、イギリスに対する文化的偏見をぶつけられる対象となる。*In a German Pension* の執筆・発表の頃、英独関係は緊迫していた。当時、イギリスにとってドイツは、大きくなりつつある脅威であったのだ。それは、工業そして海軍分野におけるドイツの発展ぶりにも現れている。1870年代から1910年代までのドイツの工業的發展はすさまじい勢いで、この頃ドイツは後進国からイギリスと肩を並べるか超えるかの工業国に発展、1898年以降は海軍強化にも乗り出していたのである。第一次世界大戦を控えたこうした英独関係との相似形を、ペンション・ミュラーにおいてイギリス人と見なされている

エクリチュール・フェミニンとしての Katherine Mansfield の “Germans at Meat”

語り手と、ドイツ人滞在客との関係に見出すことができる。

イギリス人として扱われ、イギリス人であるということを肯定も否定もせず、ニュージーランド出身であると語ることもない語り手は、ヨーロッパ中心の世界観においては不可視のニュージーランドがイギリスの一部でしかないことを示す存在である。そしてこの語り手が、彼女の国家的アイデンティティに関して、時にはイギリス人であるということを認めるといったような極めて曖昧な態度をとっているということは、語り手が国家意識自体を無意味と見ているという姿勢の現れで、国家という想像的共同体<sup>(10)</sup>の否定である。

### 3. 菜食主義とフェミニズム

“Germans at Meat” は、静養や療養のために滞在している客が多いドイツのペンションにおける食卓における会話から成っているが、この席上で、語り手は紅茶を入れるのが得意であり、ティーポットを温めるのが秘訣であると語る。すると同じ食卓についていたドイツ人の市議員が語り手に次のように答える。

“Warm the teapot,” interrupted the Herr Rat, pushing away his soup plate. “What do you warm the teapot for? Ha! ha! that’s very good! One does not eat the teapot, I suppose?”

He fixed his cold blue eyes upon me with an expression which suggested a thousand premeditated invasions.

“So that is the great secret of your English tea? All you do is to warm the teapot.” (“Germans at Meat” 2)

ここでドイツ人の市議員が、紅茶というイギリス的なものを挙げて語り手とイギリスを愚弄する。“Germans at Meat” で、北ドイツからの旅行者は語り手に “I suppose you are frightened of an invasion, too.” と言い、語り手は “I assure you we are not afraid.” (“Germans at Meat” 3) と答えるが、ここで語り手が用いている we という言葉はイギリスへの国家的帰

属意識を示している。国家意識の曖昧な語り手が、ドイツの敵意を前にしてイギリスに共感した立場をとるといふ、国家意識の相対性を示す例である。またベルリン出身の Herr Hoffmann の発言に続く語り手とのやりとりは以下のような展開となる。

“We don’t want England. If we did we would have had her long ago. We really do not want you.”

He waved his spoon airily, looking across at me as though I were a little child whom he would keep or dismiss as he pleased.

“We certainly do not want Germany,” I said. (“Germans at Meat” 3)

侵略・支配の図式が、子供を教化する大人というアナロジーで語られたという植民地支配に付随したクリーシェと化した言説の繰り返しを指摘することが可能な箇所である。そして、イギリス代表として扱われている語り手に対する “You have got no army at all — a few little boys with their veins full of nicotine poisoning.” (“Germans at Meat” 3) という発言の背後には、当時のイギリスで社会問題となっていた軍隊を形成する青年の健康状態の劣化への危機感という歴史的事実があることも明白である。テキストが当時の現実を反映していることの証左としてこの箇所を引き合いに出したのではなく、テキストを歴史の文脈のなかに置き直すという作業の確認のためである。さらに、こうした国際情勢が、語り手の立場とテキストの姿勢を決定する力学的要因であるということを確認するためである。こうした状況において語り手のドイツへの、そしてドイツ人への反感は、家父長制を背景とした支配的な男性への嫌悪と、そうした男性に同調する女性への反発につながる。“Germans at Meat” に登場する、先に見た市議員は、イギリス式朝食についての見解を次のように語る。

“Now at nine o’clock I make myself an English breakfast, but not much. Four slices of bread, two eggs, two slices of cold ham, one plate of soup, two cups of tea — that is nothing to you.”

He asserted the fact so vehemently that I had not the courage to refute it.

All eyes were suddenly turned upon me. I felt I was bearing the burden of the nation's preposterous breakfast — I who drank a cup of coffee while buttoning my blouse in the morning. (“Germans at Meat” 1)

ここでは語り手がイギリスの代表であるかのような立場に置かれているというだけではなく、ドイツ人の間に存在すると語り手が考えているイギリスのイメージが、いかに偏見とステレオタイプで歪んでいるかということも、語り手が皮肉な目で観察していることが示されている。さらにここで示されているのは、ドイツ人男性である市会議員の旺盛な食欲と、イギリスでは女性でも大量の朝食を食べると市会議員は信じているものの、イギリス人と目されている語り手が少食であるということである。上の場面のあと、ザウアークラウトとポテトを添えた子牛肉が運ばれるが、語り手は、「私にはきつすぎる」(I still find it a little strong.) (“Germans at Meat” 2) と言って、ザウアークラウトにすら手を付けない。このとき食卓に同席していた未亡人は、語り手に肉食主義者かと尋ね、語り手は3年間肉食をしていないと答える (“Germans at Meat” 2)。語り手が肉食主義であるということが何を意味しているのか。

18世紀から19世紀にかけてイギリスでは社会運動としての動物愛護が見られるようになる。1824年には世界に先駆けて動物愛護団体である王立動物虐待防止協会 (The Royal Society for the Prevention of Cruelty to Animals) が設立される。1847年にバイブル使徒協会 (The Bible Christian Church) がイギリスベジタリアン協会 (The Vegetarian Society UK) を設立した。またこの1847年に生まれた Annie Besant (1847-1933) は肉食主義であった。彼女はイギリス国教会の牧師と結婚したもののすぐに別居、1888年には神智学協会 (The Theosophical Society) に入会し、1891年には協会会長を務め、また社会運動家、フェミニストとしても知られる。1894年には彼女はロンドンの神智学会で “Vegetarianism in the Light of Theosophy” という講演を行っている。また神秘主義者、社会活動家、フェ

ミニストであった Anna Kingsford (1846-1888) も菜食主義であった。動物実験反対で知られる彼女であるが、1865年に裕福な貿易商で船主であった彼女の父が死去し、彼女にも年金が入るようになると、狐狩りに夢中になった時期もあった。1865年、公務員であった夫と結婚するが、夫は喘息の持病を持つ妻の世話のためにイギリス国教会の牧師に転身する。1872年、*The Lady's Own Paper* の編集長となった Kingsford はフェミニズムや動物実験反対主義を誌上で展開する。このようにイギリスにおける菜食主義は、動物愛護と結びつきながら、フェミニズムと共振していく。多くの女性参政権論者が菜食主義者であったという豊富な例を挙げて、Leah Leneman はイギリスにおけるフェミニズムと菜食主義の結びつきを、神智学や、ヴィクトリア朝後期には非常に活発な運動であった生体解剖反対運動、また毛皮のような服飾品への反対を含む動物愛護運動とのつながりにも触れて、論じている。Leneman によると他の多くの社会運動と同様に、菜食主義は19世紀の産物であり、Leneman が菜食主義の女性参政権論者として名を挙げている者たちのなかでも Constance Lytton, Leonora Cohen, Victoria Lidiard たちは、女性参政権運動に関わるようになるはるか以前から菜食主義であったという。「食物改革」(food reform) で知られる学派は、健康のための菜食主義を推進した。この思想に触れて菜食主義者となった女性参政権論者もいるが、こうした者達も次第に倫理的見地からの菜食主義を標榜するようになった (Leneman 275)。菜食主義とフェミニズムの共振関係は1890年代にその端を発する。1892年から1899年まで Margaret Shurmer Sibthorp が編集に携わった急進的な雑誌 *Shafts* がそのマニフェストとして菜食主義に関する記事を載せ、Women's Vegetarian Union がロンドンで活動を開始したことを報じた (Leneman 276)。

こうした思想の展開を Mansfield が直接知っていたかどうかということは問題ではなく、*In a German Pension* が書かれたのは、菜食主義がフェミニズムと共振関係にあり、また個々の教義や信条の違いはあれ、倫理や思想との近接関係において菜食主義が広まっていったという時代のなかであったということを確認しておきたい。

このような状況を視野に入れると、語り手が“Germans at Meat”で見せた菜食主義<sup>(11)</sup>には倫理性やフェミニズムの色合いが濃厚であることが分

エクリチュール・フェミニンとしての Katherine Mansfield の “Germans at Meat” かる。“The Luft Bad” の Vegetable Lady と呼ばれる菜食主義の女性は、次のように語る。

“I am making my own ‘cure,’ and living entirely on raw vegetables and nuts, and each day I feel my spirit is stronger and purer. After all, what can you expect? The majority of us are walking about with pig corpuscles and oxen fragments in our brain.” (“The Luft Bad” 42)

菜食主義とは精神を強く純粹にするものなのだ。倫理性や思想と連動している菜食主義という言葉の一変奏をここに見出すことができる。そしてこの Vegetable Lady はこのようにも説く。

“You overeat yourself dreadfully,” she said; “shamelessly! How can you expect the Flame of the Spirit to burn brightly under layers of superfluous flesh?” (“The Luft Bad” 42)

菜食主義は大食の自戒ともつながり、身体よりも精神の重視を意味する。こうしてみると、語り手が “Germans at Meat” の食卓で見せた菜食主義と少食が精神性の重視の現れであり、またそれと対照的な市会議員の大食ぶりが倫理の欠如を暗示していることが分かる。さらに “Germans at Meat” のすでに見た場面で、語り手が未亡人に 3 年来の菜食主義者であると答えると、未亡人は語り手に子どもがあるかと尋ね、いないと答えた語り手にドイツ人の未亡人は次のように語る。

“Who ever heard of having children upon vegetables? It is not possible. But you never have large families in England now; I suppose you are too busy with your suffragetting. (...)” (“Germans at Meat” 2)

テキスト生成時の菜食主義と女性参政権運動との共振関係がテキストにそ

の痕跡を残していることがこの箇所を示されている。しかも Mansfield が作家を目指してロンドンに到着した 1908 年は、女性参政権運動が盛んになっていた時期と重なる。肉食主義と女性参政権運動の共振関係をテキストに照射することによって、語り手がフェミニズム、女性参政権運動との連動関係にあることが分かる。

語り手のフェミニズムと女性参政権運動へのシンパシーが肉食主義によって暗示されている。このことを見逃さないことによって、妻、母という役割に回収されることへの反発と、出産への嫌忌感を表明する「語り」という形態をとったエクリチュールは、家父長制存続のための、そして帝国主義政策を基盤から支えるための母性称揚への異議であるという姿勢を確認することができる。そしてあまりに曖昧な語り手の国家意識は、帝国主義政策の根底にある狭隘なナショナリズムと結託した、しかしながら「想像の共同体」でしかない国家という「幻想」への抵抗であることも分かる。さらに、文学史のなかで認められてきた「物語」というスタイルに揺さぶりをかけるエクリチュールとしての「語り」は、軽視されてきた女性主体の語りを、「物語」の構築ではなく「書く」という行為自体に自覚的なスタイルで記すもので、これらの意味において、“Germans at Meat” などの *In a German Pension* における一人称の語り手による「語り」にはエクリチュール・フェミニンとしての可能性を見ることができるのである。

#### 《注》

- (1) Mansfield 自身も *In a German Pension* の未熟さには気づいていて、これほどの好評を博した *In a German Pension* の再版に乗り気でなかったらしい (Murry, Introductory Note 8)。
- (2) Anna Davin, “Imperialism and Motherhood.” などの研究がある。
- (3) Antony Alpers, *The Life of Katherine Mansfield*.
- (4) Roland Barthes, “Authors and Writers.”
- (5) Julia Kristeva, *Desire in Language: A Semiotic Approach to Literature and Art*.
- (6) Luce Irigaray, *This Sex Which Is Not One*.
- (7) Hélène Cixous, “The Laugh of Medusa.”
- (8) Elaine Showalter, “Feminist Criticism in the Wildness.” “Toward a Feminist Poetics.”

エクリチュール・フェミニンとしての Katherine Mansfield の “Germans at Meat”

- (9) 本論で言及している Kristeva, Irigaray, Cixous らの論者たちによるエクリチュール・フェミニンに関する論考に関しては Jones の論を参照している。
- (10) 「国民」とは政治的社会的実体ではなく、「想像の政治的共同体」(imagined political communities) であるという Benedict Anderson の議論を念頭に置いている。
- (11) 語り手は Mansfield 自身に近い存在ではあるが、Mansfield 自身は肉類を買っていたことが彼女自身による週次決算の記録に残っている (Margaret Scott, ed. *The Katherine Mansfield Notebooks*. Minneapolis: U of Minnesota P, 2002. 265-71.)。

#### 参考文献

- Alpers, Antony. *Katherine Mansfield*. London: Cape, 1954.
- , *The Life of Katherine Mansfield*. Oxford: Oxford UP, 1982.
- , ed. *The Stories of Katherine Mansfield*. Auckland, Oxford UP, 1984.
- Anderson, Benedict. *Imagined Communities; Reflections on the Origin and Spread of Nationalism*, Rev. ed. London: Verso, 1991.
- Barthes, Roland. “Authors and Writers.” Trans. Richard Howard. *Critical Essays*. Evanston: Northwestern UP, 1972. 143-50.
- Cixous, Hélène. “The Laugh of the Medusa.” Trans. Keith Cohen and Paula Cohen. *New French Feminisms: An Anthology*. Ed. Elaine Marks and Isabelle de Courtivron. New York: Schocken, 1981, 245-64.
- Davin, Anna. “Imperialism and Motherhood,” *History Workshop* 5 (1978), 9-65.
- Dunbar, Pamela. *Radical Mansfield: Double Discourse in Katherine Mansfield's Short Stories*. London: Macmillan P, 1997.
- Hankin, C. A. *Katherine Mansfield and Her Confessional Stories*. London: Macmillan, 1983.
- Irigaray, Luce. *This Sex Which Is Not One*. Trans. Catherine Porter and Carolyn Burk. Ithaca: Cornell UP, 1985.
- Jones, Ann Rosalind. “Writing the Body: Toward an Understanding of *l'Écriture féminine*.” Showalter, *The New Feminist Criticism*, 361-77.
- Kristeva, Julia. *Desire in Language: A Semiotic Approach to Literature and Art*. Trans. Thomas Gora, Alice Jardine, and Leon S. Roudiez. Ed. Leon S. Roudiez. New York: Columbia UP, 1980.
- Leneman, Leah. “The Awakened Instinct: Vegetarianism and the Women's Suffrage Movement in Britain.” *Women's History Review*, Vol. 6. No. 2, 1997. 271-87.
- Mansfield, Katherine. “Germans at Meat.” *New Age*. 3 Mar. 1910: 419-20
- , *In a German Pension: 13 Stories*. New York: Dover, 1995.
- Murry, John Middleton. Introductory Note. *In a German Pension*. By Katherine Mansfield. Harmondsworth: Penguin, 1964. 7-8.

- New, W. H. *Reading Mansfield and Metaphors of Form*. Montreal: McGill-Queen's UP, 1999.
- Margaret Scott, ed. *The Katherine Mansfield Notebooks*. Minneapolis: U of Minnesota P, 2002.
- Showalter, Elaine. "Feminist Criticism in the Wilderness." Showalter, *The New Feminist Criticism*, 243-70.
- , ed. *The New Feminist Criticism: Essays on Women, Literature, and Theory*. New York: Pantheon, 1985.
- , "Toward a Feminist Poetics." Showalter, *The New Feminist Criticism*, 125-43.
- Stead, C. K. "Katherine Mansfield and Art of Fiction." *The New Review*. No. 4, Sept. 1977. 27-36. Rpt. in Jan Pilditch ed. *The Critical Response to Katherine Mansfield*. Westport: Greenwood, 1996. 155-72.